寛永諸家譜

藤原氏癸廿五冊之内一
支流

114

内閣文庫		
番號	和 20199	
冊數	186(114)	
函號	特 76	1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

藤堂
中根

寛永諸家系圖傳

藤原氏　癸一

支流

藤堂

虎高

源助　法名白雲好雪　生國近江

淺草文庫

高虎

右衛門尉　佐渡守　和泉守と号す
従五位下　従四位下　侍従　左近衛
権少将　中国同じ
元亀元年江州姉川合戦のとき
浅井備前守長政より属して首を
得らるときなり高虎十五歳
同国小谷山の合戦数年の間高虎

浅井に属して城を攻もりしばしば
首級を得らる
天正元年高虎阿閉淡路守より
志らひ江州にありしとき淡路守が
家人阿閉那多助ならびに広部徳平
勇力ありし中へあつく相ともにまされしが
宅をまもり淡路守より志りぞきしに
淡路守高虎にいひくいたく汝が力を
かりて那多助を討とりたり

なかく高虎ひそかにかれか家よりわ
那女助をうかゞひこれは斬とき小
廣部主力をとらむ高虎小むね將
桐さへひそくたぬり廣部をうち
けれは從者ことごとくにげさらぬ時小
高虎十八歳なりわ
丹波國小山乃城をせむるとき高虎織
田信澄の先手小屬し勇名はあらは
また信澄國よりかへて家老をあ川

めくいひけれハ縲紲かけさすべき侍
一人をえらぶべしとあり諸人これ
高虎従ふべしといふ信澄のいはく
家をまもる従ふべくれりふとてはぬよ
縲紲のけさせなり
同七年高虎豊臣秀長の屬し
秀吉よりさうぐひ播州三木の城を
せむるとき城主別所長治城中より
突いでゝたゝかふ高虎長治が家老古

六郎右衛門と謀をあはせはかる小賀古
が首を斬秀吉大によろこび秀長に
告げてこれを感す
同十年藝州毛利輝元が家人毛利
左衛門備中國冠乃城を守る秀吉
これをせむるとき高虎まつ秀長に
志たがひて其陣にありし秀吉
令を出していそぎ城をせめおとし
屈しといへとこてりなひく高虎先

登して城中へ入敵を斬甲首は
得たり其後はなれ小城はせめおとしぬ
秀吉その戦功を感じ着せる所の
樫く緋乃羽織を脱てこれを高虎
ありたまふ
紀州一揆蜂起しあひたゝかふ事
二年のあひたなり高虎一揆乃大将冨安
を討捕そのうへ敵横浄波小要害をたか
まふくあくふをひく高虎ひそかなり

城中に入敵の様をうかゞふに矢弾丸
ものこされハあやしミ脇をはなれて
高虎を突る高虎槍を叩りかへし以
て也彼を刺つく其鑓乃血ハぬぐふに
此中に敵人ら聿を志して高虎
木戸口よりはなり發をあけて打出
敵たじろきく追つけ突とれは高虎
走りよりて敵二人を討其中一人ハ
郎従居合孫作にされハ討捕其後

一揆ことごとくくいしきぬ秀長にも功を
感じ采地三千石はくハへさづく
同十一年江州志津嶽合戦乃時
柴田勝家が先手佐久間玄蕃允山
乃尾より攻のぼる高虎秀吉乃陣
よりあまく鉄炮を下知して
敵一人をつきふせ家人渡邊金六
その首ハとらしむ此時高虎肘股
より疵をかうふるといへどもはなり

其敵は追しりぞく秀長これを賞
して二千石をくはへあたふ
同十二年秀吉織田信雄と不和成
しゆへ家臣羽柴下総守雄利勢州
松ヶ島の城にたてこもりしときに
秀長これを攻る高虎先陣となりて
一の木戸をやぶり敵しりぞきて
二の木戸城とらんとすゝみしにおゐて
しばらく相たゝかひ高虎甲首一級を

得たり秀長高虎が軍功に感入り
あえしかる事を感じ見ゆる備前
國宗の刀をあたふ
同十三年秀吉紀州をうちたいら
くるとき南國のはちかひ湯川直晴
山本主膳ひそかに山林にかくれゐ
秀吉兵を四國へ出さんとするときに
てまた國中にいでゝ蜂起す秀吉
しばらくはかりしこれをせめて

利をうしなふ此ゆへに高虎命を
うけて湯川をせむ湯川たゝ
かひやぶれて和をこふまうし山本を
せむる事数日なりこと〳〵くせめくし
山本を紀の侍りまでにさいげて
是をころさるその族徒二百五十余人
こと〳〵くこればきうみちおのへかつ乃ころ
たちまちにげのみちなけばころし
をとめて誅せらるもの二百四十余人

なかりしかばことごとく国中しづまりぬ
秀吉この功をほめ秀長より命して
高虎に五千石をくはへしむ
同年長曽我部元親家老に命
して阿波国木津ならびに一宮の要
城をうばゝしむ秀長これをせむる
ゆき横山隼人といふもの木津の城よ
り突て出高虎鑓をあはせてたゝかふ
そくさにをひく高虎疵をかうり

家秀長これを賞しよろひをぬぎ
て高虎にあづく。此後秀長四国の
軍政を秀吉にかはり一書状
をつくられけるに秀長高虎よ
りほせてこれをおこなはしむ高虎
ことをもむきをしりわてはかりことを
めぐらすことになかく元親ならびよ
木津の城主桑名左衛門一宮の城主
元親が舎弟親安高虎をはかりて

浪人し秀長に謁を
同十五年秀吉大軍を率て九州
ありしかば嶋津氏を征す高虎秀長
の麾下に發向すべき秀吉宮部
善祥坊ありて命し日州国白あり
をひく附城をかまへしむ
嶋津中務これをせめしかば城をでよ
おやうかりし時高虎これを聞ひかり
兵を率て夜深よるせゆく事一里

謀をめぐらし敵軍にまじはりて
城中へいりて士卒をはげまし
下知していよく秀長大軍を
ひきむかはゞうしろせめをせん
事ちかきにありとおほいよば
よろこんで扉を開つきいでてたゝかふ
事なればはじゝ急なりしにおよびて
敵退散す秀吉高虎を呼戦功
を感ぜ吉祥坊がいよく面白に

なひて勝利を得し事ハひとへに
これ高虎一人乃勇なりと云ゝ是に
よりて秀長一万石ばくをあたふ
其まゝ秀吉乃命によりて従五位
下に叙し佐渡乃守に任じそののちあら
ためて和泉乃守と号す
東照大権現上洛しまひ聚楽より
なひて治鍛をつかまつりしに高
虎通門をたてわてたくまはれ

此とき長光乃佩刀をたまふ
其後秀長薨去ありて子息秀保早世
して嗣子なし高虎旧恩を報せんが
ため高野山にいりてかしら剃髪す其
のち秀吉しば〳〵招きたまふよ
りて年をへて起りいでゝ秀吉に
謁す秀吉予州乃内にをひて
板嶋七万石をたまふ 旧領二万石 新恩五万石
慶長二年二月朝鮮を征すとき

高虎秀吉乃命をうけて渡海せし秀
吉数ヶ条の軍法を定て高虎よ
しめにしたがひて侍ねり朝鮮に
いる所敵船唐嶋にありて釜山海
にいでゝ日本乃通路をおひさて此
七月十五日日本乃諸将唐嶋を攻る
とき高虎一番より敵乃番船を乗
取あるひは火をもちて兵船を
焼あるひは敵をきりて海中に

戦ありともなかりしかども金邊の津
浦十五六里にある敵船をことごと
く焼しづめ、また兵をうしなはず。秀吉は
事きゝて感状をたまふ。且また
目付熊谷内蔵允・垣見和泉守・早川
主馬首・竹中源助・毛利民部大夫
太田飛騨守・福原右馬助等七人連署
して高虎小西は唐嶋の番船を高
虎一番なりの旨とられむ申しけり

高虎もまた藤堂太郎左衛門をもて
別に使として、つぶさに戦功をのぶ。
秀吉よろこび感状をさづけ、長光の
刀を使者にたまふ。
この後大明漢南はものゝ数万南原
の城を築てこれを治りつ。八月十五
日の夜諸将これをせめおとしぬ。高
虎南にむかひてつゝ先陣よりすゝみ
せめやぶり討捕もの二百六十九人

且二ッ鼻をきりて秀吉に献ず秀吉
よろこび感状をあたふ其後越川水
渕にいたり敵船と相たゝかふ高虎
旗をかゝげ郎従に深く死を軽ぜ
しむるによりて敵船ハ追散をもって
なひて高虎すゝんで忠清道法よ青国といふ
にいたり数ケ所の城をせめおとし安骨
浦に押へて附城を築長曾我部に
まもらしめ高虎も又帰朝す秀吉

感状をあたへ伊豫国にをひて一万石
を加増しすべて八万石を領ぜ
同年石田治部少輔三成ならびに
其徒黨相はかりて
大權現にそむきしてまさんとは
こゝ機遇あるまじ
大權現伏見より大坂へ入り　渡御あり
高虎多年ふかくこゝろをなすゆへなり
高虎が中嶋乃第あり　台駕成

留(とゞめ)たまふ要害(ようがい)の地(ち)なりとて一両日(りやう)
御滞留(たいりう)ありそのゝちに御内談(ないだん)あるへく伏見(ふしみ)
へかへらせたまふ時高虎志をさゝけま
て日荒屋(あらや)向嶋(むかひしま)の渡(と)りの道(みち)を作(ざう)し御警(けい)衛
固(こ)しまつる此年高虎か弟内匠助(とくらくとのすけ)
正高(まさたか)を人質(ひとじち)とし江戸へ下りけるかこれを
大権現御感(かん)ありて下総(しもつさ)の国にをきて
三千石をあたへ給ふ
同五年長尾景勝(なかをかげかつ)謀叛(むほん)の時

大権現伏見(ふしみ)より発向(はつかう)し野州(やしう)小山(をやま)に
いたりたまふとき高虎志をさゝけて
手勢あり又宇都宮(うつのみや)までをもむき
台徳院殿を守護しまいらせてまちたてまつりけり
三成(みつなり)かとく徒党(ととう)をひきゐて上方(かみがた)に
おゐて謀叛(むほん)を企(くはだて)西国(さいこく)の諸(しよ)敵(てき)と
なりぬこれによりて小山にをいて
軍評定(いくさひやうぢやう)ありける高虎は　仰はうけ給(はり)
ちかふはかへし上方(かみがた)に発向(はつかう)し　先(さき)

手に入れ給ひしとき

大権現の仰りいはく我汝等が頂陣を
まもりて進発したまふべしとなん
いひけり

台徳院殿信国の御刀をさづけたまふとなり
なほかく高虎はせく濃州よりいたり
合渡川をこえ敵をやぶりて首を得
事あまたなり既に岐阜の城をもせめ
せめおとし候なれ江戸より頂陣を

高虎が使者八月二十八日江戸にいたり
捷を
大権現に告て申ければ　御気色殊に
よろこばせたまひまたかの使をめし
て酒肴たまひ小山の陣にいたりしがたび
いそぎ御馬をばいだしたまふべしとや
こゝにおひて使者池田久右衛門
黄金十両をたまひし所高虎に
味方の諸将相よろこびけり

御鑓を赤坂にて給へて
大権現をまもりてまつる九月十日尾州
熱田に着せ給ふに自筆の御
書は高虎に給はる翌日一宮にて
いくさ評議をこゝろみ密に定
めうけたまはりて赤坂にかへり同
十四日赤坂にて　御馬をうけさせ
給ひ十五日に三成の賊徒と関原にて
たゝかひたまふに高虎が家人

藤堂新七郎良勝高虎が甥あかはきよ
里御先手の兵にまじはり居諸
軍にはたらきしが一番首は得たり
高虎すなはち家人に楮金若干をも
もてこれをそへてまゐらせハしかも
一番首の事は感じさせ給ふ
是でに高虎賊徒大谷刑部少輔を
撃んと向ふ時高虎が家人藤堂仁右衛門
高刑高虎が甥大谷が兵湯浅五助をうち

とりて其外首級数おほし高虎が組頭
藤堂玄蕃良政ハ数人とたゝかひ死を
まぬ村越兵庫高虎が陣よくよく
かく討死を高虎これが證人となる
すでに三成ハ滅亡して天下一統を
しろしめして二十万石ハ給ハる
大権現高虎が功を賞し豫州半国ハ
旧領八万石
新知十二万石
同十一年高虎妻子をいさなひ江戸へ

居しめられ御ハおもきといへども
忠志をあらはさんゆへなり
大権現これはごとく感じさせ給ふ
同年江戸御城作事の時高虎
仰をうけ給り縄張の事あり
あげられ石垣ハ築これ時御中
国ありとて二万石をくハへたまふ
同年
台徳院殿江戸よりとをく高虎が亭に

入御給る御杖あり御刀ならびに
銀子御服等をたまはる事数多なり
同十三年伊豫国をあらため伊賀
国ならびに伊勢国の中にて
領地をたまはる所負数もとのごとし
されける

大權現御判を高虎に給はる
同十四年高虎が郎従を人質とし
て江戸におきてまゐらする

同十六年
大權現駿府より高虎が亭に
渡御ありて尾張紀伊の両卿
水戸殿同じく扈従しまつり猿楽
催ありて御遊興のたびたりし　同十九
年江戸御普請のとき
台徳院殿より下坂切物二胴の清綱
拝領す
同年の冬豊臣秀頼大坂の城あり

あらく関東にそむくとき高虎
台徳院殿の命によりて先手にかゝりし
謀叛いづれ十月四日より江戸をた
ち駿府にいたりたまふとき
大権現の仰に大和の諸士を率ひ大坂よ
むかふべしとおほせたまふ別而　高命を
うけ給はりて池のほとりをでて小
大権現御入洛ありて高虎をめされ
軍令をしめしたまふ

台徳院殿御自筆の御書をたまはり
軍の事を諭したまふことあり
二十六日高虎諸軍より先だちて河州
の国府にいたり陣をとる翌日大
和の諸士ことごとくたゝかふ時に越前の
参議忠直卿国の兵をひきゐて
きこわゆじきにをひて高虎
小山の金通より謀叛すゝめ火をはなち
敵の地機を察しゝ出まつる越前の兵と

道(みち)より相(あひ)かたく軍(ぐん)事(じ)をはかりし
國府(こくぶ)よりかの翌日(よくじつ)高虎越前(ゑちぜん)大和守(やまとのかみ)
國(ごく)乃はたものと旗(はた)を小(こ)山(やま)より始めて
一宿(しゆく)し翌日野(の)小陣(だん)をとらひしハ
和泉(いづみ)壊右ハ住吉(すみよし)なりそれ翌朝(よくてう)高虎
陣(だん)をうつして住吉ばうしろに
せんとせし時御目付(めつけ)真田(さなだ)隠岐守(おきのかみ)横田(よこた)
甚右衛門鈴木(すずき)久右衛門山城(やましろ)宮内少輔(くないのせう)
きうらくいふく住吉をおいて(まへ)

兵(へい)をうつす事しかるべからず高虎がいはく
此地まことによろしからず然ば察(さつ)するに
三ッの利(り)あり一ッにはゆくいんとなれば東(ひがし)に
池(いけ)あり西(にし)より峯(みね)ありうしろに松原(まつばら)
あれバ敵(てき)兵(へい)さゞめく味方(みかた)の兵(つはもの)ハ
多(さ)かをそ(せう)のかずらんか前(まへ)一方(てう)の敵(てき)
をばやすくこれを制(せい)すべし池日(さ)
友し僉議(せんぎ)あらバ高虎一人より職(つと)城
皈(き)まくへしといふにかくめく 同使

されはこれよりしてさかひぬ高虎
はかく住吉をうしろにあて安部
路濵海に陣をとりて志かひのりは
はかりし敵乃地を焼敵もまたこ天王寺
小火をそれ川に陣高虎すゝみく
天まるありいさゝ陣をはる事数日
なり
大権現をうけたまはりてゆつりんかつて
茶臼山より要害をかまへて陣高虎

活玉のまへよいさらわ山場乃井楼を
築十一月四日よりしかくに堀端にいたり
竹束を附ひとひり鉄炮を放ち
敵乃かたに命をうしなふものあり
かくもたてはし給きしも高虎日夜怠り
なくいよいよすゝみて城を攻る事やむ
時なし十二月廿日乃夜よりて堀乃
中の柵をやぶらんとせし時和睦ありて
軍はやめぬ

元和元年乃夏大坂再乱あり高虎
先陣をうけ給はるときに大坂よ
り兵はいつくし京都をやかんとはかるよ
しを聞られしかはやて高虎諸勢にさきだ
ちて四月四日淀乃陣あり出張して
城を修理せし十八日なり
大権現様入洛ありて高虎をめして慶
軍禄をとゝませらるゝおれなわさき
台徳院殿自筆乃御書をも高虎あり

し給ふ同二十一日
台徳院殿伏見に着かせ給ふ廿六日
高虎淀城はしらく河州須奈あり
しら陣所はの海へ
大権現をむかへさせまいらす五月五日
高虎
台徳院殿乃御先手となり千塚あり
兵はそれに翌日台乃敵将木村長門
守長曽我部宮内少輔一萬余乃兵

をもむきし八尾村より出張し宮
擬村西郡村若江村に屯してゆく
高虎これを見て軍の期を察し
旗をすゝめて諸卒を下知して
相さゝふ高虎が右ぞなへ西郡より
むかひて敵と相たゝかふ首ばかり得て
をもちつゝひをすゝむ白ゑんに
うなふ此間に右ぞなへの組頭藤堂
新七郎良勝同玄蕃良重〈良政が子なり〉

等乃騎士三十餘人ことごとくうちて
の死を高虎聞て追ありおもへり
宮擬ありとにく相ふる新三郎従
十餘人つとめてはなく命をおとし
高虎が右ぞなへ八尾にむかひ長曽我部
が本陣とあひむかひて攻かゝる乃
手の組頭藤堂仁右衛門高刑同勘解由
氏勝桑名弥次兵衛親氏山岡兵部
重成以下乃侍あつかひ三十餘人これ

討死をとげて長曽我部が
軍大りに敗走す逃るを追て久宝寺
平野天王寺の邊まて討とり
そのよれいくさおりけてひ辰乃
上刻よりはじまり申乃下刻迄
高虎軍勢をひつれ八尾村乃戦場よ
陣をかへ翌日も敵天王寺なり
をひておさへゆくとき
台徳院殿高虎が陣へ入せたまひ

軍乃評定ありて其よし御諚
をうけ給ふ諸軍ともに大り
きをひ大よやぶりて大坂乃城を攻
たまひしつまふ凡あまれてかひり
高虎が斬ところ乃首九百餘級家人
討死せしものは七十餘騎雑兵歩卒
死せるものなはあり也兩國乃首
功をそうし

大權現

台徳院殿よりに御書をくだされ
六月十九日戦功を賞じ給ひ従
四位下なり叙せられまた勢州
の内におひて采地五万石をたまはり
秋文金銀の分銅をたまふなり　名香子枚
台徳院殿より別に高木貞宗の御脇指
をたまはりぬ
同二年駿府にありおはしし時
大権現あつかりはじめ唯寿院の　仰ありて

四聖坊肩衝の御茶入をたまふ
同年高虎　仰をうけ給はりて日光
山にいたり
大権現霊廟の地をえらび大僧正天海
と相議し縄をはりてその趣を言
上しこれを築く高虎又私に一院を作る
同三年山城大和の国にありをひて
五万石の地をくはへ給はり都合
三十二万三千石余は宰相まて

同四年

台徳院殿高虎が館へ　渡御ありて
猿楽を　御覧ありて御腰物を下さる　又
不知作

寛永二年五月二十八日
台徳院殿高虎が館へ入らせたまひ饗応
猿楽ありて銀子五千両御帷子五
十をたまはり且また御刀を高次に
たまはり御馬を次男左京佐高重

にありしと同六月廿八日
将軍家はじめて高虎が亭へ
入御猿楽ありし時銀子萬両
御帷子五十を給ひこれをたまはる
且御刀を高次にたまはり御馬を
高重にたまふ

同年十一月十九日　従四位にて侍従
に任ず

同三年八月十九日左近衛の権少将をかねる

任ぜ
同四年高虎　仰をうけ給りて天海
に相談して
大権現を武州の上野に勧請し
御廟を建て崇めまつる寒松院
を号して祠堂となし此年
台徳院殿上野の
大権現の霊廟たり　御参詣ありて
天海僧正にあたり　入唐の少しき寒

松院に　台駕をよせさせたまふ
同六年三月十七日
台徳院殿寒松院たり　渡御ありて
猿楽を御覧此とき斎村貞宗の
御腰物を高虎より献る同六月十二日
将軍家寒松院たり　渡御ありて延寿
の御腰物を高虎より献る此外
渡御あまた事おほし或は御茶
献し或ひは御遊興あり

台徳院殿より休務肩衝をたまひけり
輝東陽乃墨跡等を添給はる然
稀なる御中の志あまりて及ぶ
凡秀吉亮ありさづくる所の
遠書教通か次今よこれを所持せ高
亮斎南家三代ありつるをまもりて
友爵封禄かゝるもありあれは恩恵に浩
ともなる　斎三代よりかゝる深き源乃
浩遠書教通ことく小浩自筆の御書

教通あり高次にしられしかは所持す
こゝに御自筆六通今これを添読
まことにこれをもむきは後まびかふ
世の是ほ遠き意地ありしことをしれ後の人
乃よしみざるところなるべし
同七年十月廿日あり卒去歳七十
法名道賢　道号高山　院号宝松
贈権大僧都

高次

大学助　従五位下　侍従　従四位下
大学頭　生国伊豫
慶長八年高次三歳のとき伏見にて
見えて
大権現に謁したてまつり左文字の
御脇指をたまふ
同十一年正月高次六歳のとき

はじめて江戸にいたり参候す
大権現みづから則重の御脇指を給ふ
時に大学助に任じ名を[illegible]
台徳院殿に謁したてまつり兼光の
御腰物国光の御脇指をたまはる
元和二年正月十九日　給はりて
従五位下に叙す
寛永七年高虎が遺跡ことごとく
高次に給はるとき酒井雅楽頭

忠世土井大炊頭利勝　上使にして
仰の旨を伝ふ
同九年
台徳院殿の御遺物として
将軍家より御排物虚堂の墨蹟銀子五万両を
さづけらる
同十一年
将軍家御上洛の時供奉をつとむ
同年七月廿二日　仰よりて従四位

下に叙し侍従に任じ大学頭たり
転任を
今度御洛陽二條の御城にてあつく
御沙汰ありて高次封国の知行取
都合三十二万三千石余相違あるべ
からざるのむね
将軍家よりこまかに御判を高次に給り
をまゐる高次
台徳院殿

将軍家よりつくえまいり父(ちゝ)より貽ちう

ことに御恩恵(おんけい)いよ〳〵ふかし

大助丸(だいすけまる)

家紋蔦葉(つたのは)

藤堂

嘉房（よしふさ）

勝兵衛尉

東照大権現に従ひたてまつる

慶長八年に死（し）す歳六十一

吉清

従五位下　玄蕃頭
はじめ豊臣秀次につかふ秀次薨
ぜられし後浪人となり藤堂和泉守
高虎が所にありし
慶長五年石田三成謀叛せし時高虎先
手となりて濃州に進発せしに吉清
これに相したがふ岐阜城没落の時
注進のため江戸にいたり
大権現に言上したてまつる處に
御感ありて御前にめされかた
じけなくも黄金並に陣羽織を
同九月十五日関原合戦のときうち
死せし歳四十二

某

忠能　法名宗音

嘉明

将監
祖父嘉房やしなひて子とし給ふ故に
嘉房死して後
大権現のもとに遺跡をつかはされしかは
ちはやくまゐる
元和元年大坂再乱のとき嘉明和
別ありあまた大坂の兵きゝつく

郡山より火をかけんと給ふにおひ
て松倉豊後守とゝもよませむかひ
追ちらし且又生虜を得て幕下
に献ぜしよりて伏見の城
ありいるところよ
大権現生虜の事をたづね給ふに世孫
嘉明はまびろかに言上し其後に
給ありけるはやくかへして一揆に
をさめし沙汰あるべしとおほせられが

ゆへに又和州にかへる同五月六日大坂合
戦のとき水野日向守とおなじく
行山において陣し鎗をあはせて首を
寛永五年七月に病死歳四十

某

良次
玄蕃　法名卜真
藤堂和泉守高虎にしたがへ大坂に
をひて討死也

玄蕃
藤堂大学頭高次につかふ

嘉正
将監
寛永六年八月父嘉以が遺跡千石
をゆづらる後
台徳院殿
将軍家につかへたてまつれり

同十七年九月に死去す歳三十四

嘉長

主馬　生國武蔵

寛永六年八月父が跡継子なきをもつて
ゆるさる

台徳院殿

将軍家につかへたてまつる

嘉次

平右衛門尉　生國同前

台徳院殿

将軍家につかへたてまつる

寛永六年八月

高嘉

勝兵衛尉　生國武蔵

兄嘉正やしなひ子として

実は将監嘉以が子なり

寛永十七年嘉正死して後遺跡

右之通ニ御座候

将軍家ゟつかハされ候

家紋

中根

東

市左衛門尉　生国参河
廣忠につかへ織田弾正忠と合戦
のとき供奉して戦死ぞ

某

市左衛門尉
東照大権現につかへたてまつる
元亀三年遠州三方原合戦の時
討死

正則

市左衛門尉　法名良元

正堅

壹岐守　はじめの名は平十郎
台徳院殿につかへたてまつりしかは
将軍家にもつかへまつり御傍に近侍せ
寛永十五年　従五位下に叙し壹岐守に任ぜ
数度采地をくはへられ都て五
千石を領せ

正寄

次郎左衛門尉
元和九年はじめて
将軍家に謁したてまつる
寛永十八年 仰によりて小十人
組の番士となりしが
同十九年 台命によりて布衣
を着す

正朝

平十郎 はじめ名は八十郎 生国
武蔵
将軍家に仕へたてまつり 斎藤摂津
守が組に属しけるに小性組の番をつとむ

家紋茗荷の丸

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan